

英語ニュース (TV & RADIO) における インタビューの語法とその活用

真 鍋 輝 明

最近の英語ニュース報道にはインタビューが含まれていることが目立って多い。このインタビューの TV 映像を注意して見ることにより、放送英語ニュースそのもの、つまり、幅広く口語英語, colloquial English の研究はもとより、異文化コミュニケーションの研究にも活用せねばならない。

まず、インタビューそのものについての理解が必要となるので、その基本事項について言及したい。

インタビューの成功のカギとなるのは、5Ws プラス 1H である。TV-NEWS でも、RADIO-NEWS でも NEWS 番組に求められる ‘質問’ への ‘答え’ として最も必要なものを引き出すには 5Ws プラス 1H である。‘yes’ ‘no’ のみ、即ち single word comment しか引き出せないような ‘問い’ は絶対にさけるよう心掛けねばならない。

さて、5Ws プラス 1H を順にみていくことにする。

- Who calls for a name in response,
- What asks for a description,
- When pins down the timing of an event,

- Where locates it,
- Why asks for an interpretation or an explanation,
- How asks for an opinion or an interpretation.

5Ws のなかでも、一番多くの ‘答え’ を引き出すのに効果があるのは、“WHY” である。ニュース・キャスター、アナウンサー、報道関係者がニュース取材に際して、上記の要領で ‘質問’ をすることにより視聴者の満足を得られるインタビューとなる。また、‘interviewer’ は明快で、力強い声で ‘問い’ をすべきことは当然である。

上記 (question starters) の説明から、5Ws プラス 1H が successful interviewing のカギになることが理解されよう。

さらに、インタビューの語法については、IDIOMATIC EXPRESSIONS (PHRASES) が多いこと、また無駄なことばは避けて、redundancy のないようにも配慮が求められる。つまり、“EVERY WORD MUST COUNT.” の鉄則を忘れてはならないのである。

さて、異文化コミュニケーション (CROSS-CULTURAL COMMUNICATION) への活用ということに関連して、ON AIR される TV 英語ニュース (CNN, ABC, CBS, BBC など) を視聴した場合、その他、採用面接の際のインタビューについて、次の点が指摘できよう。

欧米でのインタビューは、とにかく単刀直入であることが指摘できる。ニュース放送番組での質問事項の事前打ち合わせも、本論にはいるまでの前置きもない。放送局ほかで随時行われる採用面接でも、一言挨拶をかわ

したあと, “Tell me your story.” といきなり切り込む。その一点だけである。

一般的には日本人の場合, 質問に対して, 様々な答え方が考えられる「包括的な質問」を好むが, 欧米人はそのような ‘generalisation’ を極端に嫌う。欧米人の思考回路によるものである。従って, 日本人の質問は曖昧になる傾向があるのに対して, 欧米人は specific (具体的) な質問を好む。極端な場合, 欧米人はひとつのことしか質問しない。

こうしたことを通して, 学ぶべきことが多々みられるのである。例えば, 街頭でのインタビューの際, interviewer と interviewee との距離, 相手の目を見て話すこと (EYE-CONTACT) などに見られる日本人が相手に話しかける際との違い, つまり, 非言語コミュニケーション (non-verbal communication) における動作学 (kinesics), 接近学 (proxemics), 対物学 (objectics), 接触学 (haptics), さらに, 時間学 (chronomics) などの研究に活用できることになる。

また, 日本人のアナウンサー, キャスター, 放送記者などによるインタビューの際に見られる場合との比較研究を目的として観察してみることで, その behaviour culture に違いがある場合が顕著であることも指摘できる。

例えば, JR中央線での脱線事故の際の関係者へのインタビューなどその良い例であった。ニュースを録画して研究してみると, よくわかるのである。

さて, インタビューそのものについて求められる technique のうち,

interviewer の立場にある場合に、いかにして 5Ws プラス 1H を活用すべきかについて考察してみることにしたい。

A fishing boat is in trouble about 80 kilometers out to sea with a fire apparently out of control in the engine room. The Maritime Safety Agency official is ready to be interviewed on the phone.

この様な状況においてはどの様な ‘問い’ が効果的であろうか。

- * How safe are the crew members?
- * What steps are being taken to rescue them?
- * How did the fire break out?
- * Where did it happen?
- * How quickly was it discovered?
- * How can the fire be prevented from spreading?
- * Why weren't the crew able to control the fire?
- * When was the ship last checked for safety?
- * What problems were discovered then?

上記のごとく、HOW, WHAT, WHERE, WHY, WHEN がそれぞれ question starter として活躍することになる。‘言うは易く、行うは難し’ (Easier said than done.) であり、実戦に備えて十分、日頃から演習をしておかねばならない。

演習問題として次の様な形式のものを活用できよう。

Interviewer: Could you tell us where you were when the fire broke (1),
how you got to hear about it, and what your (2) was?

Crew member: I was out on the deck, when the (3) came in and told us fire had broken out in the engine room. I didn't think (4) of it. I was sure they'd put it out. But I didn't know how (5) I was.

上記の各括弧内に下記の単語の中から、最も適切と思うものを選んで埋めるのである。

- a. in b. wrong c. much d. reaction e. out f. steward
(1-e 2-d 3-f 4-c 5-b)

上記の様な状況での interviewer の question としては次の様なものも好ましい。

- * How the safety laws need tightening up?
- * What provision is there in maritime law for setting sail without an adequate or healthy crew?
- * What cover does travel insurance offer crew members? ,etc.

さて、これまで述べたごとく、英語ニュース放送における INTERVIEW に大切な 5Ws プラス1H の question starter としての重要性を考えるとこれを学生の就職の際の interview test (面接試験) へ活用することが好ましい。

特に、多国籍企業のように入社の際の interview が英語で行われる場合

に備えることが考えられる。(日本語での面接でも言語の違いだけでその要領は勿論同じと言える。在外日本企業への就職を希望する多くの人達(non-Japanese)が日本文化研究のなかで、面接試験にどう対応して首尾よく就職するかの要領についての研究に取り組んでいる。実践性を重視し、実際のインタビューのシーンの VTR を活用して、こんな質問にどう応えるかを研究している。この際の使用言語は英語である。勿論、企業によっては日本語の場合もある。

一例として示せば、オーストラリアの QANTAS (カンタス) 航空の場合、言葉は英語であることは当然だが、多文化多国籍の国らしい特徴といえるが、いろいろの国籍の人達にそれぞれの出身国についての知識のあることの確認もインタビュー・テストの内容とし、採用後その就職希望者のそれぞれの特徴を乗客対応に生かすのである。実に見事な現実的対応であると言えよう。

さて、こうした就職に際して行われる英語でのインタビューの場合、どのような questions が一般に多いかを考察してみると次の様なことが指摘できる。

まず、大学新卒者に対するもっとも頻繁に用いられる 'interview questions' には次の様なものが考えられる。

1. Why do you want to work here?
2. Why don't you tell me about yourself?
3. How did you find out about this job?

4. What immediate contributions can you make to this company?
5. What kind of books do you read?
6. How do you get along with other people?
7. How will you feel about doing routine work?
8. What are your plans for the future?
9. What salary would you expect?
10. How would you be getting to work?

多国籍企業への就職を希望する学生などは、日頃、listening & speaking の演習を怠らず、こうした質問への備えをしておくことが好ましい。

次に転職のような場合のインタビューを考えてみると、上記1～10の質問に加えて以下に示すような質問が追加されることがあろう。

1. Why do you want to change jobs?
2. Why did you leave your last job?
3. What have your former co-workers thought of you?
4. What kind of managerial or supervisory experiences do you have?

5. Where does this job fit in with your career goals?
6. How long would you expect to stay with this company?
7. What would you say about working well under pressure?
8. What kind of things have you done to show that you have initiative?

この様な質問に要領よく対応することにより，“interviewee”は“win jobs”すなわち、自分の望む企業等への就職を成功裡に運ぶことができよう。

さて、欧米で「気持ち」を尋ねるのは、本当にそれを知りたい場合で、質問が少し具体的になるものである。例えば、長野オリンピックでスキー・ジャンプの原田雅彦選手には、「失敗したとき、またチームに迷惑をかけたという思いが頭をよぎったか」などとなろう。また、ノルウェーの選手に対して「これで七個めの金メダルですが…」と未完結の質問をなげかける日本人記者がいたが、相手もよく答えてくれたと思う。よほど協力的でなければ，“What’s your point?”と一蹴されたことと思われる。

次に、スタジオ・インタビューの場合、日本では、予定した質問をすべて時間内に消化しようとする傾向がある。アメリカでは、キャスターはインタビューが始まると質問事項を書いた紙をすて、相手の答えから面白い部分を掘り下げて話を展開していく。話題を変える場合も、前の答えの中からキーワードを選んで次の質問につなげる。このため、流れによどみがない。

日本にもそのような聞き手がないわけではないが、予定通りに次々に質問をこなすことを望むディレクターが圧倒的に多い様に思われる。ひとつには、キャスターとディレクターの信頼関係によることも考えられる。また、出演者が予定外の質問を好まないことも考えられる。予定通りに質問が進むことをよしとする日本と、何が起こるか分からないことを楽しむ欧米の風土の違いともいえるのである。

さて、技法的には、「how」で質問を始めることが多い。How do you feel about....?” と聞けば、まとまった意見を引き出す可能性がたかいためである。

また、「印象」や「期待」を聞きたい場合，“What’s your impression of...?” “What do you expect...?” と聞くのではなく “What’s your best experience here?” “What do you hope to get most out of being here?” などと、ある程度焦点を絞って聞くと、一段と具体的で面白い話が引き出せることになる。

次は、初対面の人への突然のインタビューの場合、相手と向かい合うのではなく、隣に並んで話をきくことが多いことに気が付く。心理学的に、この方が相手に警戒感を与えず、味方意識 (‘I’m on your side.) を与えることができるからである。

インタビューは「会話」なので、ネイティブのキャスターは口語表現 (colloquial expressions) を用いるよう心掛ける。例えば，“Would you please explain..?” でもいいが、さらに相手をリラックスさせるために，“What do you have to tell us about?” とか、場合によっては，“Tell us about...” などとして、話が弾むように神経を使っているのである。

私自信の体験的考察によれば、ニュース・インタビューその他 (one-point interview などを含む) の場合、うまく運べたと思われるものは、次の準備を十分に行った時であることが指摘できる。

1. 下調べが十分になされた場合、
2. 筋立てを大切にした場合、
3. 呼び掛けの言葉に注意を払った場合、
4. はじめとおわりを大切にした場合、
5. 聞き手としての心得を大切にした場合、
6. 喜怒哀楽を大切にした場合、
7. 時間的制約をきちんと守るよう努めた場合 などである。

さて、前述のスキーなどスポーツ・インタビューの場合、日本では、選手の‘気持ち’に関する質問が圧倒的に多い。金メダルを獲得した選手に対して、「今のお気持ちは？」などの質問をするのがその例である。

欧米の場合、気持ちは挨拶代わりに、主な質問は技術的な問題などに踏み込む場合が多い。例えば、スキー・ジャンプの原田雅彦選手に対して、「一回目の失敗に終わったジャンプと2回目の場合とでは、何が違ったのか」などと質問するであろう。

また、芸能関係ニュースの場合も同じ要領であると考察する。TV番組『ニュース・ステーション』（テレビ朝日）での通訳を介してのインタビューでも、

1. What do you feel about.....?
2. Why couldn't you find.....?

3. How would you comment on.....?

などのようにスタートした場合、内容のある‘答え’が提供されていることが分かる。

ここで文部省認定、実用英語技能検定試験の1級二次試験および準1級二次試験についての研究結果について言及しておきたい。

一次試験に‘PASS’しても二次試験で‘NOT PASSED’となってしまう受験者が多すぎるという現状は誠に残念なことである。第二次試験は‘INTERVIEW TEST’である。今年(1998年)の1級二次の場合、午前と午後で、それぞれ五つのトピックスが出題されたが、そのうちの一つに“Should high-school education become compulsory?”があった。受験者がこれを選んだあと、1分間、組立てを考え、そして2分間、speaking performance を行ったあと、ネイティブ試験官と日本人試験官からの質問がなされるが、これも結局、受験者から内容のある‘response’を引き出すためのものなので、当然、試験官も5Ws プラス 1Hで始まる質問で受験者の英語を話す‘ちから’(口頭での英語運用能力)を確かめようとすることになる。

準1級二次の4コマの絵を見ながらの‘NARRATION’のあと、試験官が質問するが、その多くがWHAT～?/HOW～?で始まるか、あるいは、According to the passage, などで始まっても、結局は‘What～?’を使っただけの質問ということになる。この様なことを心得て準備しておけば、‘PASSED’をものにするための大きな前進につながるようになる。

話し方は人生だといわれる。良き聞き手となって、いい話を聞き出すようインタビュー技術の研究・考察を続けたい。